

科学研究費助成事業（基盤研究（S））研究進捗評価

課題番号	16H06323	研究期間	平成28(2016)年度 ～令和2(2020)年度
研究課題	経済格差と教育格差の長期的因果 関係の解明：親子の追跡データに よる分析と国際比較	研究代表者 (所属・職) (令和4年3月現在)	赤林 英夫 (慶應義塾大学・経済学部（三 田）・教授)

【令和元(2019)年度 研究進捗評価結果】

評価	評価基準
A+	当初目標を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる
A	当初目標に向けて順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれる
○ A-	当初目標に向けて概ね順調に研究が進展しており、一定の成果が見込まれるが、一部に遅れ等が認められるため、今後努力が必要である
B	当初目標に対して研究が遅れており、今後一層の努力が必要である
C	当初目標より研究が遅れ、研究成果が見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である
<p>(意見等)</p> <p>本研究は、慶應義塾大学において実施されてきた子どもパネル調査をさらに拡充し、親子を対象とした長期データ基盤を構築するとともに、家庭背景と学力格差に関する実証的分析を行うものである。</p> <p>研究成果の国際比較を可能とする点でも有意義な研究であり、データ整備は概ね順調に進んでいるようであるが、一部の調査において低回収率によりサンプル数が不足するなどの問題が生じている。そのため、今後の調査において対応策を検討する必要がある。</p>	

【令和4(2022)年度 検証結果】

検証結果	当初目標に対し、期待どおりの成果があった。
A	経済格差と教育格差の関係や、それらに対する教育政策の有効性について、幼児期から青年期に至る長期間のパネルデータを構築するとともに、親子を対象とした長期追跡データも合わせて利用しながら分析を進めるという研究計画を着実に遂行した。
	また、研究進捗評価で指摘されたサンプルサイズの問題や、新型コロナウイルス感染症の流行に伴い親子実験が継続できないといった問題等に対して、適切な対応を行い、研究期間の後半では研究成果の公表を進めるとともに、国際比較プロジェクトにも発展した点は評価できる。